予後不良の子どもを持つ両親を支える看護実践上の指針
－看護者の認識に焦点をあてて－

島津千秋（応用看護学）

【キーワーズ】 三重の関心，立場の変換，持てる力，家族・看護者の認識

本研究の目的は、看護者が意図的に関わることによって、予後不良の子どもを持つ両親の認識および言動が変化したと思われる場面において、その時の看護者の認識の特徴を明らかにし予後不良の子どもを持つ両親を支える看護実践上の指針を得ることである。

研究対象は、受け持ち看護師として予後不良の拡張型心筋症患児とその両親に受け持った時点から家族、特に両親への関心を寄せ続け、家族が一生懸命に子どもを看病し看取ったという思いと親として無力感や不全感を少しでも減らすことができるようにという思いで意図的に看護を行った看護場面における看護者の認識である。

研究方法は意図的に関わった場面を選定し、看護者との関わりの中で両親の認識および言動が変化したと思われる看護場面を再構成する。次にその場面における「看護者の判断過程」「看護者の認識と表現の特徴」を研究目的に照らして分析した。

研究結果として、研究素材として抽出した1事例12場面から、28の「看護者の認識と表現の特徴」を取り出した。それらの内容の共通性・相異性を比較検討し、共通するものを類別した。この分析過程から、両親の認識および言動が変化し主体的に子どもと関わりを持つために、看護者が持つべき予後不良の子どもを持つ両親を支える看護実践上の指針を、以下の7項目導き出した。

1 これまでの夫婦間での役割を見抜き、夫婦の持てる力が有効に働くよう、夫婦それぞれに状況に応じた支援を提供する
2 患児の一番近くにいる母親の24時間の生活を常に描き、立場の変換を繰り返しながら、母親の持てる力を最大限に子どもへ注ぎ、親としての役割を果たすことができたと実感が持てるように支援する
3 母親がたとえ病気を持っていても成長発達する子どもの持てる力と患児の笑顔とを見ることで、懸命に生きようとするわが子を実感し、ケアする喜びや目標が持てるよう支援する
4 現状の家族の生活像を描き評価・修正を繰り返しながら家族を褒め励まし、努力を保障し、家族の持てる力を最大限に発揮できるように支援する
5 看護者は家族としての後悔や無力感をできるだけ最小限になるように、家族全員が同じ思いで患児に関われる様に調整役を担う
6 看護者は患児が回復を見込めない状況であろうと、常に家族と共に考え、悩み、歩んで行く存在であることを伝え続ける
7 チーム全員で対象の目標像を描き、継続的な看護が提供できるように常に評価・修正を行いながら、チームとしての力を最大限に活用する